
深夜は憂鬱の始まり

むう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深夜は憂鬱の始まり

【Nコード】

N6006B

【作者名】

むう

【あらすじ】

卒業論文に追われる「僕」が深夜のファミレスで強盗事件に巻き込まれた。その場に居合わせた客は4組。挙動不審高校生・アブナイ女子高生・離婚寸前夫婦そして「僕」個性的な4組の客はこの先どうなってしまうのか？

その1

その1

深夜2時

片田舎のどこにでもある普通のファミリーレストラン。

卒業論文の提出も差し迫ったある夜「僕」はそこにいた。

近所の狭いアパートをねぐらにしている「僕」はよくこのファミリーレスを使っている。

冷暖房、ドリンクバーの完備。深夜なら人も少ないから静かなものだ。

2

それにひきかえ、自慢の我が家は家賃1万9千円のボロアパート・

いや、ボロというレベルではない

解体現場の廃材をかき集めて作ったような家なのだ。

隙間風は当たり前、当然冷暖房などあるわけもない。

こんな家に住んでいるからこそドリンクバーだけで長時間居座れるファミレスには1分

1秒でも長くいたいというものだ。

特にここ2週間は大学卒業がかかった卒業論文を書いていた。

「僕」の右手にはボールペン、左手には原稿用紙

本当ならパソコンで打てれば楽なのだが先日バイト先の店長との喧嘩でクビになり

そんなものを買う余裕なんてない。

だったらファミレスなんかこなればいいのだが、とても家でかけるような環境ではないのでファミレス代については食費と同様に必要経費として割り切っている。

今のところ親からの仕送りで何とか生活しているものの実家も決して裕福ではないので

仕送りもいつまでしてもらえるか分からない。

もし、もう1年大学に通うことになれば学費のアテはない

バイトだって掛け持ちするにしても限度がある。

そのことを考えると、どこまでもネガティブな気分になるが

要は卒業してしまえば学費はなくなるし、幸い就職も内定しているから

それまでの辛抱だと思えば今の生活にも我慢できるというものだ。

そして現在

順調に書き進めていた「僕」は論文を書く手を止め、休憩しようと空になったコーヒークップを持ちドリンクバーに向かった。

ふと店内を見渡してみると客は4人。

この時間には不似合いな、小学校5・6年生くらいの男の子を連れた夫婦

周りをキョロキョロ見ながら貧乏ゆすりをするジーンズに黒いパーカー姿の高校生らしき少年

ブレザー姿で窓の外を見ながらブツブツ何かをつぶやく虚ろな目の女子高生

普段この時間は「僕」一人だけなのだが、どういうわけか今日は他にも客がいた。

しかも内二人がどう見ても高校生。

（親子ずれに関しては保護者同伴とはいえこの時間に小学生を連れ出すのはどうなのだろう？）

そんな事を考えてみたものの今の「僕」には他人を詮索するほど余裕はないのだ。

とりあえず眠気を覚まそうとカップにコーヒートを注ぎ席に戻った。

窓際のこの席から一つボックス席を挟んで向こう側にいる子供づれの夫婦から

言い争う声が聞こえてきた。

「あなたのそういう態度に私は我慢できないの！」

「じゃあ俺と別れたら拓也とどうやって暮らしていくつもりだ！ろくに働いたこともないお前が子供一人養えるのか？」

（おいおい別れ話かよ、しかも子供同伴で・・・）

しかし驚いたのはここからだ

その小学生の卓也君とやらは表情ひとつ変えずアイスクリームを食べている。

子供だから話の内容が理解できないのではない。

時折、夫婦の顔を見てはため息をつき

「いい加減にしなよ、人のいる所で。迷惑だよ。仮に別れるとしても俺は母さんについていくからね」

なんてのたまうのだった。

（今の小学生はどれだけクールなのだろう・・・）

（いやドライというべきか）

そんな親子を見ると裕福じゃなくても別れずに「僕」を育ててくれ

た両親にはただ感謝するばかりだ。

「僕」はそんなことを考えながら斜め前にいるキョロキョロしている少年に目を向けた。

彼の右手は軽く震えており、目は常に周りを気にしているようだ。

目が合った

彼は一瞬止まり、すぐに俯きじつと動かなくなってしまった。

（僕の顔はそんなに怖いですか・・・？）

（っっていうか、この少年は大丈夫なのか？）

僕は思わず思ってしまった。

それと同時に深夜のファミレスでの人間観察という娯楽に目覚めてきたのだった。

さて、残るは反対側の窓際の女子高生。

さつきから一切体勢を変えず窓に頭をもたれさせてブツブツつぶやいている。

正直彼女は相当ヤバイ気配を出していた。

そのヤバイ雰囲気や霧囲気ではなく「本当にヤバイ人」として印象付けたのは

テーブルの上に乗つけた両手首の無数の切り傷だ。

僕はあえて見て見ぬフリをした。

（はぁ、今の日本は病んでいるなぁ・・・）

今、僕の周りにはネガティブ要素を持ち合わせた人間しかいないことに気づき

こちらまで鬱な気分になりそうだ。

そろそろ論文を再開させなければ。

そんなことを思った矢先、1発の銃声が店内に響いた。

僕の憂鬱は本格的なものになった。

その2

その2

「パン！」

それはあまりにもあっけない音だった。

その音が銃声だと気づいたのは少し後のことになるが

音がしたその瞬間は例えるなら子供時代に新聞紙を折って作った、振ると「パン」と大きな音を出すアレ（正式名称は分からないが）を僕に思い出させた。

が、しかし

音のした方向を見ると黒いマスクをした3人組が立っていた。

その中の一人が重厚な黒い鉄の塊を天井に向けて掲げており

天井には穴が開いていた。

僕は思った。

「あ、これテレビで見たことがあるぞ」

いやはや自分でも嫌になるくらい頭の悪い感想ではあるが

いざ実際の事件現場に遭遇してしまうと脳が今起きていることをち

やんと認識しないのかもしれない。

いわゆる一つの現実逃避。

だから恐怖はなかった。

単純に深夜のファミレスに黒いマスクの男3人が入ってきて銃を発砲したそれだけの事実。

何より黒マスクはまだ何も要求を言っていない。

そこで、おもむろに背の低い黒マスクの一人が声を発した。

「店内にいる客・従業員はこっちに来い。」

そう言いながらドリンクバー付近のボックス席を手に持った鉈で指した。

幸い僕のいる場所はついたてによって死角になっており反射的に身を隠した僕は見つかってないようだった。

これに確証はないが犯人たちの顔の動き等から導き出した僕の推論だ。

この時点でようやく僕の中に焦りが芽生えてきた。

他の客はどうしたのだろうか・・・

親子づれは？拳動不審高校生は？アブナイ女子高生は？

犯人側からも見えない代わりにこちら側からもあちらの様子がほとんど確認できない。

後に気づいたことだが犯人たちが客を集めた場所というのは外からは一切見えないし

窓やドアから遠いため大声を出したところで外には聞こえない。

始めは犯人が見回りに来ることを警戒したが犯人が3人であること、3人ともそんなに体格

が良くないことから人質にした客からの反撃を警戒し3人で見張りをしていた。

犯人が声を出さないところを見ると、とりあえず皆おとなしく従っているらしい。

その時である、男の叫び声とともに犯人の声が聞こえた。

「うわあああつ！」

タッタッタと駆けていく足音

「おい！テメエ！」

犯人の叫び声。

ガシャン！

ガラスの割れる音

おそらくコップが割れる音だろう

犯人たちがあわてている雰囲気伝わってくる

「あの野郎逃げやがった！」

おそらく犯人の隙について逃げたのだろう。

これで助けを呼びに行ってくれば助かる。

（とりあえず見つからないようにおとなしくしていよう）

そんな事を思いながら僕はため息をつき窓から外を眺めた。

店の裏の方から男が走って出て行った。

格好から見ると、店のウェイターなのだろう

そして、後ろから追いかける黒マスク。

僕側から見るとその二人が右から左にかけていった。

犯人に見つかるのではないかと思い一瞬身を潜めたがどうやらウェイターを追うことに精一杯のようだった。

ウェイターは速かった。

黒マスクとの距離が離れていった。

が、しかし

僕の安堵は次の瞬間、絶望に変わった

ファミレス横の道路から出てきた1台の大型トラックがウェイターをはねた。

黒マスクも思わず立ち止まる。

（これで警察が来れば助かるな。ウェイターはかわいそうだが）

が、ここでも僕の考えは甘かった。

トラックは一旦停車したものの夜の闇に走り去った。

（おいおい、ひき逃げかよ！）

一応言っておくと、ここら辺は田舎も田舎のド田舎なのだ。

朝の7時過ぎになってからうじて通学する学生が2、3人通る程度なのだ。

ひかれたウェイターは死んだカエルのような体勢で動かない。

助けが来る望みは絶たれた・・・

もちろん朝になれば誰かが通るかかってくれるかもしれない。

が、僕の卒論は明日の9時が提出期限。

ここから大学まで2時間半

6時30分には出ないと間に合わないが、6時代に人が通らないのはこのファミレスヘビーユーザーである僕がよく知っている。

僕は半ば監禁状態である事よりも提出期限のことで頭が一杯になっていた。

提出期限まであと7時間30分

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6006b/>

深夜は憂鬱の始まり

2010年10月11日03時32分発行